

明るい未来をつくるために

近津小学校 6年

近藤 璃莉（こんどう りり）



私は今年の夏休みもお母さんの実家の相馬に泊まりに行きました。棚倉町から相馬市までは遠いのでなかなか行くことができません。だから、私は毎年相馬に泊まりに行くことを楽しみにしています。相馬と言えば、海水浴、浜焼き、おいしい海の食べ物などたくさん良いものがありました。しかし、5年前の東日本大震災の津波で流され、海の食べ物も放射能の影響で食べたりすることができなくなりました。私が、相馬に行って一番楽しみにしていたのは海水浴でした。そして、その後にバーベキューもしました。しかし、震災の後は海には行くことができず、海に行っても少し足を水につける程度しかできなくなりました。相馬のおばあちゃんが、

「おばあちゃんは、この海を見て小さい時から育ってきたんだよ。この穏やかな海が何百人という人の命をさらっていった事が信じられない。でもやっぱり、この海のある場所が好きなんだよ。」

と、話していました。実際に震災のあった年の五月の連休に相馬に行って、津波のあとを見た時には言葉が出ませんでした。今まであった家がなくなっていて、道路にあるはずのない船が上がっていました。私も小さい時から何度か来ていた場所なので全く変わってしまった風景にびっくりしました。津波の被害にあった親戚の家も土台だけしか残ってなくてすごく悲しかったのを覚えています。でも、私の親戚の人はみんな無事だったのでそれだけは、安心しました。おばあちゃんのお友達や地区の一緒だった人は、たくさん亡くなったそうです。おばあちゃんが遺体安置所に行ったとき、

「もしできれば一人でも多くの身元が知りたいので多くの方の顔を見ていってください。」と、言われたそうです。相馬の人は、私たちが想像できない程の辛さを経験して生活しているんだなあ、と感じました。おばあちゃんのお友達にあった時も

「震災後は、本当に地獄のようだったんだよ。毎日泣きながら生活していたんだよ。」と、話してくれました。震災で失われたものは家や人の命だけではなく、今まで当たり前のようにすごしていた生活の空間、その人の気持ちや感情までも、奪われていったと思います。震災の時だけの辛さではなく、今の生活にも影響しているんだなあと感じました。私たちはテレビで見て、津波や放射能の被害の大変さだけを感じていましたが、後の生活に影響していることの辛さも知りました。海の漁師さんなどは、仕事がなくなり、生活するのが大変だと聞きました。また、今年相馬に行ったときに、震災後初めて行ったところがあります。そこには、以前何十頭という牛がいました。ところが、一頭もいなくなっていました。どうしたのかとたずねると、

「放射能の影響で全部処分されちゃったんだよ。」と、教えてくれました。私はとてもびっくりして、こんなところにも影響があるんだなあと思いました。その牛は、お肉になる牛なので買っていた人の生活もまた、大変になってしまったのだらうなあと思いました。

今年の相馬の海を訪れると今までなかったものがありました。それは、津波で被害にあった人たちの遺品や名前、写真などが置いてある建物でした。今でも行方不明の方の写真や被害の様子わかる写真などもありました。震災から五年がたち、私たちの中では少しずつ震災に対する意識がうすれているのかもしれませんが。それはきっと、津波やその後の生活がそれほど大きく私たちの生活には影響しなかったからかもしれません。けれども相馬に行って実際に話を聞いたり、そういうものを見ることにより、改めて震災があったことの現実、まだ今も震災の影響で苦しんでいる人たちがいることの実事を知ることができます。

今年の夏休み中、おばあちゃんの家でホッキ飯を食べました。相馬はホッキ貝がとても有名でおいしく、震災後、五年ぶりに食べることができました。甘くてとてもおいしかったです。しかし、放射能の影響を心配して他県の人々がこの震災にあった地域の特産品を口にすることは少ないと思います。きちんと検査もして安全だということが分っているので、たくさんの人に食べてもらうことが復興につながると私は思います。

震災がきっかけで、私にも大きな夢ができました。それは、助産師になって一人でも多くの人を命を取り上げたいと思ったからです。震災以降、福島県の人口は減り、福島県で産まれる赤ちゃんの数も減っているとテレビや新聞で知りました。その中で、福島県で産まれた赤ちゃんは『福島の明るい希望である』とテレビでいっていたことがとても私には印象的でした。被災地では生活の安全を考えて若い人たちが遠くに移り住み、高齢者が残って生活していることが多いようです。福島県に、新しい命を増やすためには、若い人たちにこの福島県で生活してもらうことが、はじめの一步だと思います。そのために一日も早く安心して暮らせるまちづくりを国全体の問題として考えてもらいたいと私は思います。そして、私が助産師になり、一人でも多くの赤ちゃんを取り上げ、福島県に明るい希望を届けていきたいと思っています。